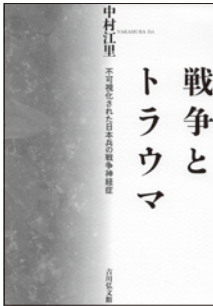


■ 書 評



戦争とトラウマ
一不可視化された日本兵の
戦争神経症一

中村江里 著
 吉川弘文館
 2017年12月 336頁
 本体価格 4,600円+税

私事になるが、書評子が卒業した大学の教養部は市川市の国府台こうのたいにあり、道路に面した反対側に国立国府台病院（現、国立国際医療研究センター国府台病院）があった。「あそこはもともと陸軍の精神病院だったんだよ」と教えられた。卒業して精神科医になりたてのころ、今度は東京都小平市にある国立武蔵療養所（現、国立精神・神経医療研究センター病院）で働くことになった。そこもまた広大な敷地を持った精神科病院であったが、「戦争が進むにつれて精神障害の兵隊が増えて国府台病院だけでは収容しきれなくなって、急遽作られた陸軍の精神病院だったんだ」という話を聞かされた。それに続いて、「入院していた兵隊は戦争ヒステリーの患者で、足を引きずったり松葉杖をついたりしていたのが、終戦と知ったとたん喜んで走り出したんだって」という都市伝説が語られるのである。まだPTSDとかトラウマなどという言葉はなく、当時すでに戦後30年近く経ち、戦争神経症などは遠い時代の話と考えられていたのである。

さて、本書は戦時中の日本の軍隊で生じた精神疾患患者が受けた処遇をめぐるさまざまな問題について、社会学的な手法を用いて論じたものである。著者は精神病院とそれを取り巻く社会という視点から、かろうじて残された陸軍の精神病院の記録や関係者からの聞き取りなどの情報をもとに緻密な議論を展開している。まだ30代の気鋭の社会学者である。著者は執筆の目的として、「不可視化された日本兵の戦争神経症」を社会学的な視点から調査し、戦争のような圧倒的な状況が人の心身に及ぼす影響と、それらの人びとを社会がどの

ように受け入れたかを明らかにしようとしたという。

本書では、まず軍事目的の心理学や医学が、戦前のアカデミズムの中でどのように研究されていたかが述べられる。続く章では主として国府台陸軍病院を舞台にして、「戦時神経症」を代表とする戦時精神医学の研究が、軍医でもある精神科医によってどのように行われてきたか、またそこでの兵士たちの処遇はどうであったかが、おどろくほど多くの資料をもとに論じられている。また、一般陸軍病院であった新潟県の新発田陸軍病院を対象とした調査では、残されたカルテの一部から治療内容を調べる一方、地方紙の報道から彼らが地域からどのような目で見られていたかも明らかにされる。患者である兵士に対する恩給制度やその策定方式についても詳しく研究されており、戦争神経症の患者は判定基準では身体疾患や外傷患者よりも低く見られていたこと、その背後には「戦時ヒステリー」患者に疾病利得をなるべく得させまいとする医師たちの態度があったとする。最後に、終戦後も長く戦争のトラウマに悩み続ける元兵士たちが、彼らを診療していた現代の精神科医から紹介されている。

精神科医としてやや疑問に思ったことを追加しておく。本書は戦争神経症を議論の対象としているが、国府台陸軍病院の資料を見ると入院患者の4割は統合失調症で、「ヒステリー」は1割程度である。戦争というトラウマが統合失調症の発症や症状増悪に関係していることは否定できないとしても、これは通常のトラウマ反応の図式では説明できないであろう。また、著者がしばしば引用するハーマンの「心的外傷と回復」に対しては、彼女の広がりすぎたトラウマ概念について行けない精神科医も多いのではないかと。

ともあれ、精神科医のなかでも、トラウマやPTSDなどを研究している人たち、精神医学の歴史を調べている人たち、戦争と精神医学について興味を持つ人たちには、大いに推薦したい。戦時の精神科医療は特殊な状況であったかもしれないが、当時の問題の一部は現在でもまだ潜在しているはずである。

（仙波純一）